

「は、入ってるよお……浩平のが、私の奥まで入ってるう……ああ……あああ……」

自分の胎内に異物が収められるという違和感に香月がうめく。

「ああ、香月のなか、あつたかいよ……ぬるぬるしてて、気持ちイイ……」

「やだ、言わないで……あつ、ダメ、動かないで……まだ痛い……あくう……」  
つらそうに眉根を寄せるが、それでも少しずつ和らいでいるのか、最初ほど痛がってはいない。散々ほぐされた女陰が、徐々に肉棒の大きさに慣れてきていた。

「あまり力まないで。……そう、息を吸うよりも吐くのを多くして……ほら、だんだん痛くなくなってきたでしょ？」

「はっはっはあ……ま、まだ痛い……んうっ……はあ、はああ……」

破瓜はかの衝撃に涙を浮かべながらも、健気けんけいに姉の指示に従い息を吐きつづける。それに伴い、浩平のペニスを痛いほどに締めつけていた膣壁せんとうが少しずつ緩んできた。逆に肉壁が複雑な蠕動ぜんどうをはじめ、初めて受け入れたペニスに絡みついていく。

「アアッ、変なの……入り口のほうはまだ痛いのに、奥のほうがむずむずしてるのぉ……やあ、怖い……こんな変、変だよお！」

初めての挿入で悦びを感じはじめたことに、香月は戸惑いの表情を浮かべた。

（な、なんなの、これ？……あんなに痛かったのに、それもだんだん薄れてる……あ

あ、イヤよ、初めてなのに感じるなんてダメえ！

だが意識すればするほど、膣道の奥をつついてくる熱い存在をはっきりと感じてしまう。雄々しく張りだしたカリ首、力強く脈打つ肉筒が粘膜を通して伝わってくる。

「か、香月……ああ、香月い！」

「ま、待つて！ 動かないで……やあッ、まだ動いちゃやだあ！ はううンン！」

肉棒を柔らかく包みこんでくる肉襞の心地よさに、最初に浩平のほうが折れた。香月の名を叫びつつ、腰を前後に振りたてる。愛液と破瓜<sup>は</sup>の血に濡れた肉棒が、ぐちゅぐちゅと音をたてながら膣口を出入りする。

「はあン、あン！……深い、浩平のが、お腹をずんずんしてくるうっ！ ああ、やめて、お願いだからこれ以上奥まで挿れちゃだめえ！」

裂かれるような痛みはいつしか遠ざかり、代わりに脳が痺<sup>しび</sup>れるような鈍い快感が下腹部を襲う。今まで触れたことのない場所を亀頭に擦られるという快感に、次第に溢れる声を堪えられなくなっていくた。

「ああっ……やん……やっ……はああっ、ダメなの……こんなのダメなのにい……ああ、イイ、浩平に擦られるの、気持ちイイよお！」

そしてついに、香月は自ら感じていることを口走った。一度言ってしまったことで



精神のたがが緩んだのか、香月の喘ぎ声は一気にエスカレートしていった。

「イイっ、そこ、感じるのお！ いけないのに、香月、初めてなのに、奥まで突かれて感じちゃってるのお！ アア、もっと、もっといっぱい決つてえ!!」

「フフ、香月ったらもう感じてるの？ さっきまで痛い痛いって泣いてたのは嘘だったのかしら？」

汗と涙に濡れた香月の顔を、妖しい笑みを浮かべた真琴が覗きこむ。

「う、嘘じゃないの、さ、最初は本当に痛かったのに……ああっ、あん！……なのに……ふあッ……奥を擦られると、気持ちよくなっちゃうのお……やああ、当たってる、浩平、深すぎるうう！」

ウエイトレス服を汗でびったりと肌に張りつかせながら、香月が床の上で身悶える。両手を使えないのがもどかしいのか、しきりに上半身を左右によじっている。

乱れたスカートの裾からのぞく太腿が、無意識に浩平の胸に絡みついていた。自ら腰を浮かし、より深い結合を求めてしまう。

肉棒が女陰を出入りするたびに、染みでた愛液がぐちゅぐちゅとあたりに飛び散る。すでに破瓜の血も洗い流され、溢れてくるのは白く濁った粘液だけになっていた。

「浩ちゃん、教えたでしょ？ 同じように突くんじゃなくて、いろいろな角度をつけ

て腰を振りなさい」

「は、はひっ」

浩平も限界が近いのか、顔を真っ赤にして、それでも真琴の指示通りに怒張の角度を変えてきた。今までとは異なる場所への刺激に、香月がいよいよ追いたてられる。いやいやをするように頭を振り、嗚咽をもらす。浩平の背中で組み合わされた両足のつま先がピンと反りかえっている。

膣道はまるで熱湯を注がれたように熱く、カリに引つかかれるたびに腰が浮きあがる。処女膜を喪<sup>うしな</sup>った痛みなどとうに消え去り、残ったのは純粹な快樂だけだった。ペニス突き入れられ、肉襞を抉られ、秘毛同士が擦れるたびに、一步一步絶頂への階段をあがっていく。

「溶けちゃうよ、溶けちゃうつ。ダメつ、もうおかしくなるの、私、もう無理い！」

「いいのよ、香月。イキなさい。浩ちゃんにオマ×コ溶かされて、好きなだけイッちゃいなさい！……」

「イヤ！　こんなのおかしいっ……くっ……イ、イク……ダメつ、イッちゃう……イクうっううう！！」

食いしばった歯の間から、香月の生臭い声が飛びだした。